

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23580300

研究課題名(和文) 環地中海における農業生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究

研究課題名(英文) Study on the agricultural production and the food trade in medeteranian partnership

研究代表者

末原 達郎 (SUEHARA, Tatsuro)

京都大学・(連合)農学研究科(研究院)・教授

研究者番号：00179102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地中海に面する北アフリカの諸国とヨーロッパの諸国との間で、どのような食料貿易が行われており、それが地元の食料生産にどのような影響を与えているかを明らかにした。アフリカではモロッコとチュニジアを選んだ。調査の結果、チュニジアでは、食用作物の小麦を増産するのではなく、輸出作物のオリーブを増産することで、小麦輸入を上回る輸出高を獲得していた。これは「環地中海」貿易圏を超えた小麦の輸入が旧東欧諸国との貿易で獲得できていた為である。モロッコではヨーロッパやアメリカとのFTAによって貿易を結び、不利な貿易状況にあった。いずれの場合も「環地中海連合」域圏の弱体化がみられた。

研究成果の概要(英文)：In this study, the author made more clear the new economic system replaced on the older Mediterranean food trade system in Morocco. But new system such as FTA between Morocco and U.S.A. and other countries dose not to be profit to Morocco. Moroccan agricultural production is inclined to food crops such as wheat, but it is too much depend on waterflood even today, cannot fix the quantity of production. As the result, the total value of import wheat is larger than total value of agricultural export, Moroccan food trade is suffered from perpetual deficits.

In contrast, Tunisian agricultural structure moved to product more export crops such as olives and dates. Those crops are exported to Mediterranean European countries. The total value of export of olives and dates is increasing in these twenty years. It is larger than total value of import wheat. Tunisia succeeded to the food import country from Europe to new wheat export countries such as Ukraine, Kazakhstan and Russia.

研究分野：農業経済学

科研費の分科・細目：国際農業

キーワード：環地中海 北アフリカ 食料貿易 農業生産 地中海連合

1. 研究開始当初の背景

ヨーロッパとアフリカとの間の食料貿易を、ヨーロッパの側の諸国とアフリカの側の諸国との双方の関係から、明らかにしようと試みた研究である。ヨーロッパ農業の研究は、これまで大陸の農業の研究を中心に行ってきた。本研究では、ヨーロッパの農業研究を、海を通して見ていこうとするところに特色がある。特に、ヨーロッパ南部に位置する地中海とそれに対岸する北アフリカの農業と食料貿易に焦点を当てた研究を行った。また北アフリカの農業の研究においても、地中海を中心とした食料貿易と結び付けて研究するところに焦点があった。

研究代表者である末原は、アフリカの食料生産と食料貿易の関係を長年にわたって研究してきた。今回、北アフリカの食料問題を研究するにあたり、地中海を中心とした食料貿易を研究の基点に据えることを目標とした。第一には、地中海という海の貿易によって、地中海の北と南の食料貿易がどのように結びつけているかを明らかにし、また、それが近年になって変化しているのかどうかを明らかにする必要があるからである。第二には、元フランス大統領であるサルコジが、「環地中海連合」という概念を掲げ、この地域の貿易・経済活動に独自の意味と特色を与えようとしていたからである。これまで、アフリカとヨーロッパの経済関係は、植民地対植民地宗主国という枠組みで見られてきたが、果たして「環地中海連合」という枠組みは、これまでの枠組みとは異なる枠組みなのか、それとも EU の南側への拡大を意味するものなのか、いずれにしても、アフリカとヨーロッパを結ぶ関係が新たな枠組みになるのかどうかを検証する必要があるからである。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような問題を、特に北アフリカの食料問題を中心に調査・研究し、さらに近年起こりつつある北アフリカの民主化の問題とどのように結びついているのかを明らかにすることを目的としていた。例えばチュニジアにおけるジャスミン革命においては、食料価格の高騰と食料危機が原因となっているという報道がなされているが、それが事実であるか、またどのようにすれば、北アフリカにおける食料問題が危機的な状況になるのを防げるかを明らかにすることが

目的であった。また、「環地中海連合」という経済圏の設立は、何を意味し、何をもたらすのかを実際の農業生産と関連させて研究し分析することを目的としていた。特に、研究の中心になったのは、北アフリカではモロッコとチュニジアであり、南部ヨーロッパでは、スペイン、フランス、イタリアであった。調査の中心は北アフリカにおいた。

3. 研究の方法

研究の方法としては、現地調査と文献統計データの収集を行う。現地調査は、平成 23 年度に北アフリカのモロッコを中心に行った。ヨーロッパ側では、スペイン、フランスで文献調査を行った。平成 24 年度には、北アフリカのチュニジアを中心に現地調査を行った。ヨーロッパ側では、イタリア、フランスで統計・文献を中心に調査を行った。平成 25 年度は、北アフリカのモロッコで実態調査を行った。ヨーロッパでは、スペインとフランスで調査を行った。

本研究は、研究代表者末原のほか、研究協力者として坂梨健太(日本学術振興会奨励研究員 PD)と村川淳(京都大学農学研究科博士後期課程大学院生)の協力を得て進められた。坂梨健太は、主として、チュニジアとモロッコの実態調査に参加し、村川淳はスペインにおける統計資料文献資料の調査と実態調査に参加した。なお、末原は、いずれの調査地(モロッコ、チュニジア、イタリア、フランス、スペイン)においても実態調査を行った。

4. 研究成果

本研究の全体的な研究成果としては、科学研究費『環地中海における食料生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究』(p.1-p.74, 京都大学農学研究科生物資源経済専攻農学原論分野発行)を、2014年3月31日付で出版した。

要点は、以下のとおりである。

第一に、北アフリカと南ヨーロッパの食料貿易は、ここ 30 年間で、大きな変貌を遂げている。特に、独立以降、北アフリカ諸国にとって食料貿易の相手国は旧宗主国であったフランスや EU 南部のスペイン、イタリアに限られている傾向が強かったが、1990 年代以降は、特に輸入農産物に関しては、新大陸諸国(カナダ、アメリカ、メキシコ)からが増加し、さらに 2000 年代に入ってから、

旧東欧の諸国（ロシア、ウクライナ、カザフスタン）からの輸入が増加しており、このことによって、植民地宗主国と旧植民地という経済的貿易関係が崩壊してきていることがわかった。これは、今までの南北問題の枠組みからではとらえられないことを示していることが明らかになった。

しかし、こうした世界に広がる市場システムに対して、対抗しようというヨーロッパ側からの試みの一つが、サルコジの提唱する「環地中海連合」の構想であったと位置づけることができる。

それでは、市場経済のグローバル化がヨーロッパと北アフリカという枠組みを超えて拡大したことにより、北アフリカの食料生産と食料貿易はどう変わったのであろうか。これは、チュニジアとモロッコでは、異なることが明らかになった。

チュニジアにおける食料生産は、本来の主食である小麦の生産を拡大する方向ではなく、果物や野菜の生産の増加へと向かっていった。チュニジアにおいては、野菜であるトマトやキャベツの生産が増加し、果実においてはオリーブの生産とナツメヤシの生産が増加した。オリーブはオリーブオイルの原料として、ナツメヤシは乾燥させたデーツの実として、輸出され、多くの輸出額を獲得することができた。このことによって、オリーブとデーツの輸出額の総計が、小麦の輸入額の総計を上回るようになっており、食料貿易における赤字は、ここ数年以来解消されている状況にある。これは、一つには市場圏の拡大により小麦が安く購入できる状況にあったこと、次にイタリア向けのオリーブオイルが順当に増加し、予想以上の収入を確保していること、第三にデーツが、ヨーロッパ圏域をこえて、地中海周縁部のイスラム諸国への輸出が増加していることが明らかになった。

一方、モロッコにおいては、自由貿易協定を対EU、対アメリカとの間で結ぶなどFTAによる市場の自由化を図ってきている。しかし、食料生産の側面から見てみると、小麦生産の画期的な増加は見られず、依然として年ごとによる生産量の大小が大きい。このため、小麦生産の少ない年には、大量に外国から小麦を輸入しなければならない状態が継続している。時には、10億ドル以上の輸入額を超えているため、輸出食料であるトマトやマンダリン・オレンジ、オリーブの輸出額を合計しても8億ドル前後で、はるかに輸入超過型の食料貿易となってしまう。主要農産物としてのトマトなどは、国民の食生活にも多

くの貢献をしているが、逆に、食料貿易のバランスは悪くなってしまっている。モロッコの食料供給構造は慢性的な輸入と、それによる赤字であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 9 件)

末原達郎、「新たな農学の構築と農業経済学の役割」、『農業と経済』第 80 巻 4 号、p.3、2014 年 3 月

末原達郎、「モロッコにおける食料生産と食料貿易」、『環地中海における食料生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究』(pp.27-34、京都大学農学研究科生物資源経済専攻農学原論分野発行)、2014 年 3 月

坂梨健太、「モロッコ漁業と西サハラ問題」、『環地中海における食料生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究』(pp.27-34、京都大学農学研究科生物資源経済専攻農学原論分野発行)、2014 年 3 月

村川淳、「スペインの食料生産と食料貿易 地中海諸国との地域的連関を見据えつつ」、『環地中海における食料生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究』(pp.51-73、京都大学農学研究科生物資源経済専攻農学原論分野発行)、2014 年 3 月

末原達郎、「アフリカ農民社会における自足自給 アフリカにおける農民研究とアフリカ小農論争に基づいて」、『アフリカ・モラルエコノミーの視圏 その源流・変容・未来に関する論点の総合化のための基礎的研究』福井県立大学、pp.153-161、2014 年 3 月

末原達郎、坂梨健太「環地中海における食料貿易と食料生産 チュニジアを中心にして」、『生物資源経済研究』、第 18 号、pp.61-84、2013 年 3 月

末原達郎、「西アフリカ・北アフリカにおける食料問題と構造的危機」、『農業と経済 食のシステム・クライシス』第 79 巻 3 号、pp.151-156、2013 年 3 月

末原達郎、「食料生産と社会構造」、『生物資源経済研究』第 17 号、pp.1-17、2012 年 3 月

末原達郎、「都市文明社会の中の農業」、『総合人間学』第 5 号、pp.5-18、2011 年 5 月

〔学会発表〕(計 2 件)

末原達郎、「アフリカの生存農業と食料貿易」『中部大学開学 50 周年連続講演会』、
2014 年 1 月 25 日、中部大学
Tatsuro, Suehara, ‘Can Japanese family farmers survive the last liberalization of agricultural market?’ ,
World Congress of Rural Sociology,
30th July, 2012 , universidade de Lisboa,
Lisbon-Portugal

〔図書〕(計 2 件)

末原達郎、「農業経済・農村社会学」『アフリカ学事典』昭和堂、2015 年 6 月 30 日、
全 657 ページ (256 - 269 頁)
末原達郎、坂梨健太、村川淳『環地中海における食料生産と「地中海連合」域内の食料貿易に関する研究』(京都大学農学研究科生物資源経済専攻農学原論分野発行、全 74 ページ)、2014 年 3 月

6 . 研究組織

(1)研究代表者

末原 達郎 (SUEHARA, Tatsuro)
京都大学・農学研究科・教授
研究者番号：00179102